

【酒井文書】 鳳至郡

一六九二

將又次能候間、自是有馬可令湯治覺悟候。其邊珍儀候者、可示預候。

御使札於京都相達候。仍嶋海苔箱一被懸御意候。遠路一入令賞翫候。隨而昨日廿八御馬揃、我等茂騎馬候。様子御使者見物候間、可有物語候。近年不罷上候條、毎日祇候候。然而北國表之儀茂御尋之間、其元之始末等折々申上事候。聽而令下國可申述候。猶山中橋内可申候。恐々謹言。

(天正九年) 二月廿九日

(桑田) 勝 家 在判

(備中景隆) 温井備前守殿

御返報

【酒井文書】

一六九三

御狀謹而頂戴仕候。殊更珍物之嶋海苔一袋、忝致賞翫候。方々儀候處、我等式迄難有奉存候。兼而上様御在京之事候。則御使者京へ被罷上候。定御返事可有之候。爰許之

儀先書申入候。相替段於有之者、從是以飛脚可被申上候旨、可預御披露候。恐々謹言。

(天正九年) 二月廿四日

久 宗 在判

柴田勝家殿從臣久宗より能州温井景隆之書翰、天正九年二月廿四日壹通。筒井内記。

三月廿七日。織田信長、長連龍に、不日菅屋長頼を能登に下さんとすることを報す。

【長 文書】 金澤

一六九四

追而杉原參十帖到來、懇志悅入候。

書狀委細披見候。仍長尾喜平次、越中面罷出候由候條、即人數差越候處、去廿四日北退之旨注進候。此時不殘可打果之覺悟候き。早々敗北、不及是非次第候。彼面入情候可然候。尚不日菅屋九右衛門尉可差下候間、可成其意候也。

(天正九年) 三月廿七日

(織田) 信 長 在印

(連龍) 長九郎左衛門尉殿

四月廿八日。菅屋長頼鹿島郡七尾より、上杉景

勝の臣須田滿親に、景勝が越中出馬の非違を詰問す。

【伊佐早文書】 羽前

一六九五

珍札本望此事候。如仰今度景勝至于小出地御出馬、神保越中守・佐々内藏助、爲御禮儀罷上候留主之處御行之段、都鄙之嘲言語道斷題目、御越度難盡紙一面候。然而内藏助・越中守被馳向付而、不思分敗軍之體、重々被失御面目儀共候。定而可爲御在陣と被存、拙者類迄罷下於彼地、始而可遂見參所存之處、早速被打入之條、不及是非當國爲仕置七尾在城候。去年以來度々預示之由、一通も不相届候。乍去友閑うたへは御内存慥承儀候。則雖達上聞候、一圓不被能御返答候。就其五ヶ條之趣委細拜見仕候。元來被對信長に御別心無之由、相違候。謙信御存生之時、尾・濃在國之節、重々被仰通無二雖御入魂候、長住身上被取消故義絶之條、自前廉無御別儀筋目表裏眼前候。將又小出表之儀、内藏助親類上勢悉罷置付而、御用捨之由相見紙面候。如何様ニ計策候御文體、上

方ニ者無案内之儀候。於實儀者相應馳走可申候。様子御使僧に申渡候。恐々謹言。

(天正九年) 卯月廿八日

(菅屋) 長 頼 在判

(備前) 須田相模守殿

(正頼) 上條入道殿

(山崎秀仙) 專 柳 齋

(上包) 須田相模守殿

上條入道殿

菅屋九右衛門尉

長 頼

五月六日。上杉景勝の臣田中尙賢等、直江兼續に、越中願海寺城の寺崎盛永が能登の菅屋長頼に誘殺せられたることを報す。

【上杉家文書】

一六九六

謹而言上、仍去四日戌之刻、願皆寺表に火先相見得候間、昨日未明に従半手目付差越候處に、及極晚罷歸、才覺之分者、寺崎民部左衛門尉於能州切腹、其上彼家中に小野大學助・大貝采女与申者兩人令談合、菅屋九右衛門尉を二之廻輪迄引入、實城取詰之段申候。小野大學をバ喜